

短期大学の英語教育の目標

中島 直樹

1. はじめに

平成19年4月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く69名の短期大学ビジネス総合学科新生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語学力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、一年次の英語の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B (TOEIC のリスニングセクションに重点を置いた演習) と TOEIC イングリッシュ I C・I D (TOEIC のリーディングセクションに重点を置いた演習) を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて、12月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し、今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2. 過去数年間の英語力調査の結果について

平成14年度の英語力調査から振り返ってみたい。この年度から英語力調査に同じ問題を使用している。英語力調査自体は平成14年度以前にも実施されていたが、難易度の高い問題であったため、平成14年度に基礎力を重視した試験問題を新たに採用した。年々、学生の英語基礎力が低下

し、平均点が30点台に低迷するようになり、試験としては難しすぎると判断したためであった。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験であった。新入生のほとんどにあたる93名が受験し、全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき、この3つの層が14年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、平成15年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

前年と比較すると得点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが、基本的には14年度とそれほど変わってはいない。しかし、14年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（14年度は6名）ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30点

から74点までの中間層にはいくつかの山があったことが14年度の英語力調査の検証で分かった。そして、14年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中間よりやや下に比重が移ってきた。

次に、平成16年度の結果について検討したい。43名の新入生が受験し、全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表3の通りである。

表3 平成16年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33名	約50.5点
現代文化	10名	約50.4点
全 体	43名	約50.5点

平成15年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては4.5点、現代文化学科においては2.2点、全体では4.0点下がった。平成14年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。この傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いていた。この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高かった。

全体の得点の分布を調べてみると、基本的には15年度とそれほど変わっておらず、15年度の分布をほぼ継承していた。90点以上のかかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも15年度と同様であった。それに加えて、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が5名となり、前年より3名減少してしまった。Aクラスといえども、それまで以上に絶えず基礎を確認しながら授業を進めなければいけない状況になった。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。平成14年度までは、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度から中下位に比重が移り、その傾向は平成16年度も続いていた。良いとは言えない本学入学生の英語力の傾向であるが、そのことが年々、平均点を下げている最大の理由となっていた。

次に、平成17年度の結果について検討したい。80名が受験し、全体の平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表4の通りである。

表 4 平成17年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57名	約56.9点
現代文化	23名	約55.5点
全 体	80名	約56.5点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては6.4点、現代文化学科においては5.1点、短大全体では6.0点上昇した。平成12年度から短大入学生の英語力調査のデータを採用しているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。特に、平成16年度入学生の学力低下は甚だしかったが、17年度に来てようやく上向きに転じた。数値的に見て、平成14年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点の分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が増えたので、まったく異なった形になった。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引車の存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、17年度になってようやくその流れが大きく変わった。

最後に、平成18年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表 5 平成18年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、17年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。17年度にいったん上昇に転じたが、今回また大きく下げている。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。全体の得点の分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であるにもかかわらず、グラフの形は前年とまったく違うものになっている。前年はどの層にもほぼ均等に

数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていた。しかし、18年度はその層には6名しかいない。ピークは40～44点のところであり、16名が集中している。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いるが、この層に関しては、前年の6名と大差がないと考えてよいであろう。90点以上のかかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様である。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名と大差はない。しかし、中位の層は前年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目につく。つまり、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっているのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度でもあり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、18年度はその層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げている最大の原因であった。

3. 今年度の結果について

今年度もこれまでと同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く69名が受験し、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表6である。

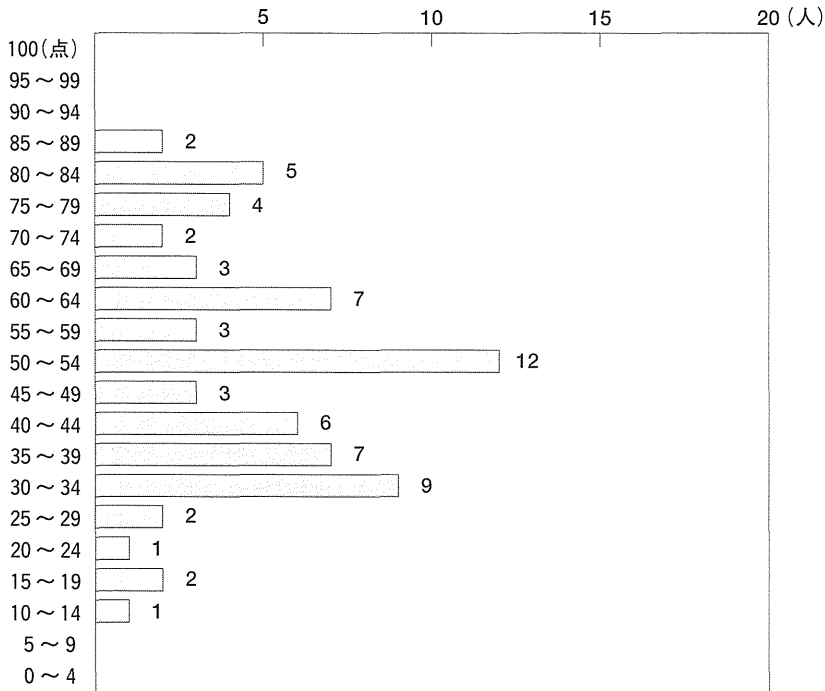
表6 平成19年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約51.0点

ビジネス総合学科になって2回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約48.3点から2.7点上昇の約51.0点となった。平成14年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14年度：56.9点、15年度：54.5点、16年度：50.5点と年々下降の一途をたどり、17年度に56.5点といったん上昇に転じたが、平成18年度に48.3点と大きく下げ、上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまったが、今回またわずかに上げている。本学に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下傾向にあることは否定できないと思うが、やや下げ止まりした感もある。

次に、全体の得点の分布を見てみることにする。100点を5点刻みに分け、それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである

平成19年度英語力調査結果得点分布グラフ（4月実施）



昨年度と比べ、平均点が若干上昇したためグラフの形にわずかな変化が見られるが、特に大きな変化とは思われない。得点のより低い層により多くの学生が集中するというこれまでの傾向を継承していると言ってよいであろう。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に12人、45点から59点までを中位の層に18人、30点から44点までを下位の層に22人となっており、これまで通り基礎力のない学生の多さが目立つ。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は、昨年の6名から、今年は11名に増加している。ピークは昨年は40～44点のところであったが、今年は50～54点に移動しており、これらが今年度の英語力調査の明るい材料であろう。

4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は2番と37番であり、正解率は82.6%であった。

(2) A: Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B: Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

昨年は74.3%の正解率であった。

(37) A : I ' m sorry to be late. The bus didn ' t come on time this morning.

B : ()

1. This afternoon. 2. Don ' t worry.
3. Yes, you can. 4. No, I didn ' t.

最近の学生はこのような会話形式の問題には慣れてきているようだ。

次に正解率の高かった問題は10番であり、正解率は76.8%であった。

(10) A : I don ' t know () Central Park is.

B : It ' s not far. I ' ll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

昨年は79.2%の正解率であった。毎年、不正解者の多くが2を選んでいるが、今年はなぜか4を選んだ学生が多かった。

次に続くのは42番であり、正解率は75.3%となっている。

(42) どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where (① a ② you ③ did ④ such ⑤ find ⑥ nice) coat ?

1. _ ⑥ _ ⑤ _ _ 2. _ ① _ ④ _ _ 3. _ ② _ ④ _ _ 4. _ ③ _ ⑤ _ _

中学校で習う疑問文の基本的な形であるが、最低限の基礎力を問うために出題した。平成17年度では、この問題が最も正解率が高かった。正解率が75%を越えたのは以上の4問であった。

反対に、最も正解率の低かった問題は18番の

(18) If it () tomorrow, I ' ll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

であり、正解率は20.2%と低かった。不正解者は1と3に大きく分かれた。be動詞がないのに主語 it の後ろに直接形容詞をつなげたり、ing形を続けたりする基礎力不足が目立つのは毎年同じ傾向である。この問題は毎年正解率が低い。

次に正解率の低かった問題は15番の

(15) I just bought a new swimming suit. Now I ' m ready () summer.

1. for 2. along 3. at 4. on

であり、正解率は21.7%であった。5人にひとり強しか be ready for を知らないのは意外であった。

(26) Be kind () old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

正解率は24.6%で、65%以上の学生が3と解答していた。

(8) Mr. Harada went to Kenya () pictures of African animals.

1. takes 2. took 3. taken 4. to take

この問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが、正解率は26.0%と低かった。7割以上の学生が不定詞の基本的な使い方を理解していないという信じられない結果が明らかになっている。選択肢1, 2, 3を選んだ学生はほぼ均等に分かれているが、これは毎年同じ傾向である。

正解率が30%を割った問題がもうひとつある。

(50) 私はいつも学校から帰る途中、公園を歩いて帰ります。

I always walk across (① from ② the park ③ on ④ way ⑤ my ⑥ home) school.

1. _①_②_ _ _ 2. _⑤_③_ _ _ 3. _⑥_⑤_ _ _ 4. _③_④_ _ _

1番から35番までは基本的な文法・語法、36番から40番までは会話、41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。今年の学生も不定詞、関係代名詞等の基本的な文法が弱く、中学校レベルでつまづいている現状が明らかになっている。

5. 12月実施の英語力調査および TOEIC テストの結果について

これまで、4月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を分析してきたが、12月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査した。第1回目（4月実施）と第2回目（12月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表7である。

表7 英語力調査結果比較

第1回目	第2回目	得点差
約51.0点	約55.0点	プラス4.0点

63名が受験し、第2回目（12月）の短大全体の平均点は55.0点で、第1回目より4.0点上昇した。昨年度の5.5点の上昇には及ばないが、かなり満足できる上昇幅であると思う。短大入学時には全体的なレベルは低かったが、1年間かけてしっかり教育し、何とか例年のレベルまで引き上げられた結果が表れている。もちろん得点を下げた学生もいるが、多くは現状維持か得点を上げている。29点以下のほとんど基礎力のない学生は6名と変わりはないが、30点以上の学生に大きな変化が見られた。第1回目の時には、中間層の下位に行けば行くほど多くの学生が集中していた（上位12名、中位18名、下位22名）が、第2回目には中・上位に比重が移った（上位16名、中位17名、下位14名）。4月には90点以上の学生はゼロであったが、12月には96点の学生が1名お

り、しっかり勉強した学生は着実に結果を残していた。

また、今年度も、12月に本学で実施された第4回 TOEIC IP テストを受験するように指導し、1, 2年生48名が受験した。全学との比較は次の表8の通りである。

表8 第4回 TOEIC IP テスト結果

学 部	受験者数	平均点
短 大	48名	253.5点
全学（短大含む）	149名	286.1点

短大を含む全学で149名が受験し、平均点は286.1点であった。短大の最高点は360点、平均点は253.5点であり、全学の平均点を下回っている。300点以上の学生は5名であった。TOEIC400点を目指して授業をやってきたが、今年度は目標を達成することはできなかった。

6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。平均点48.3点と初めて50点を割り、過去最低を記録した昨年度に続く年度のため、かなり心配していたが、なんとか上昇に転じることができた。評定平均値の高い学生を多く集められた平成17年度を除いて、平均点は年々低下していたが、どうにか今年度は反発することができた。とは言え、平均点が50点ちょっとであるので、多くの学生が中学校レベルでつまづいており、基本的な文法を修得できていないことは明らかである。年間を通してたえず基本を押さえながら授業をすることによって、やっと平均点を数年前のレベルに引き上げることができているというのが率直な感想である。

TOEIC については、400点を目標に授業を行ってきたが、最高点は360点であった。目標には到達することはできなかったが、300点以上が5名おり、そのうち4名が1年生であるので、2年次のインテンシブ・イングリッシュの中で400点を目指して指導していくつもりである。卒業までに何とか TOEIC400点レベルの学生を育てることを今後の目標としたい。